

総合教育研究センター  
学生向け情報誌

クレードル

19号

# CRADLE

Center for Research And Development of  
Liberal arts Education  
19th issue

はいさい ちゅーがなびら



## 沖縄のやさしいドライバーたち p.2

伊藤 義之（総合教育研究センター非常勤講師）

カッコいい～



## 俺はハートで走る p.3

箱田 徹（総合教育研究センター）

メタって



## 「メタ的」な話から始めよう p.4

関本 克良（総合教育研究センター）

いまや三年一昔



## ICTの普及とわたしたちの生活 p.6

山本 和行（総合教育研究センター）

水平線の向こうに……



## 心の健康法15 波がくるのを待ちましょう p.8

仲 淳（総合教育研究センター）

## 沖縄のやさしいドライバーたち

総合教育研究センター非常勤講師 伊藤義之



左の写真の真ん中にある青い看板をご覧ください。これはいったい何でしょう。アップにすると「信号待ちの間、道をお譲りください。」と書かれてあります。沖縄では、信号近くにあるお店や工場などの駐車場出入口付近に置かれたこんな看板をよく見ます。信号待ちをしている車が連なると駐車場から車がなかなか出られません。そこで、協力をお願いすることになります。実際この看板をはさむように二台の車の間にスペースがありますね。

このような看板がなくても沖縄では駐車場の出入口付近では駐車場から車が出られるように間隔を空けるのがドライバーの



一般的なマナーになっています。また、横断歩道に歩行者がいると沖縄のドライバーはたいてい止まってくれます。全国どこでもそれがルールのはずですが、本土のドライバーは滅多に止まらないですよ。もちろん沖縄にも止まらない人はいます。でも、8割の人は止まるのではないのでしょうか。本土で8割以上が止まらないのとは好対照です。

人口140万の沖縄には140万台の車が走っています。老若男女、ほとんどの成人が免許を持ち、家族の数だけ車を所有して交通ルールとマナーを守って走っています。本土では前方の信号が黄色になると「あ、もうすぐ信号が変わる。急がなきゃ」とばかりスピードを上げて交差点を通過する人が多くいます。一方、沖縄では信号が変わることを予測していて黄色になると止まります。もちろん何事にも例外はありますが、8割のドライバーはそうしています。本土のドライバーは8割以上が急いで通り抜けるのではないのでしょうか。

1年あまり前から奈良と沖縄を行き来する二重生活をしていますが、奈良に帰ってきても運転がやさしくなりスピードも出さなくなります。しかし、本土滞在が1週間、2週間となるにつれふと気がつくと「やさしくない」運転になってしまっている自分に気がつきます。横断歩道に立っている歩行者を見逃して通過してしまったりすると「そろそろ沖縄に戻る時期かな」と考えている私です。

## 俺はハートで走る

総合教育研究センター 箱田 徹

家族と友人の影響で自転車ロードレースを見るようになった。いまはトップシーズンで、5月はジロ・デ・イタリア、6月末からはツール・ド・フランスである。数年前はフランス国営放送の生中継を無理矢理観ていたのだが、今年からは日本語実況付きの環境だ。しかも名解説者が横に座っているおかげで、レースの見方もわかってきた。何気ない選手の振る舞いや集団の動向が、さまざまな意味をもつものとして表れるようになるから面白い。

データやエビデンスに取り囲まれ、最新鋭の機材を装備して闘う選手たちの姿を見ていると、そこで競争しているのは生身の人間であることに逆説的に気づかされる場面に何度も出会う。私が数字からそこまで意味を読み取る力がないこともあるし、落車という不幸な事態や肝を冷やすような速度での下り区間走行のこともある。だがそれだけではない。



ここはまだ仕掛けどころではない、ここで頑張っただけで勝ちに行く必要はない、もしも負けたら後が苦しくなる——そんなことは頭ではわかっている。無線で他チームやライバルの情報も聞こえるし、監督の指示も伝わってくる。しかしそれでも身体が反応し、動いてしまう選手たちがいる。先日のツール・ド・フランスでは、優勝候補のタデイ・ポガチャールが圧倒的な勢いで山道を登坂するシーンがあった。抜かれていく選手たちは追いかけるどころか、ぐいぐいとペダルを踏み続ける彼の姿を呆気にとられて眺めるだけだった。相手関係を考えればそこまでする必要のない状況だったのだが、結果的にはこのアタックによって彼はレース全体を（この原稿を書いている時点では）手中に収めてしまった。そして彼に限らず、レース後のインタビューでは、予定はしていなかったが、行くしかないと思った、とか、体が勝手に動いてしまったという趣旨の発言が聞こえることは少なくない。

プロらしからぬ行為なのか？ そうではないだろう。むしろ高度に数値化され、管理統制された世界の住人だからこそ、勘やひらめきが雌雄を決する要素になる。勝負に絶対はない。二度目もない。確率の高い方を選択しても勝利は約束されない。そもそも確率は定義上未来を開示しない。そして何より負けたことをデータやエビデンスや確率のせいにはできない。負けは負けだ。

データ重視の現状に対して、ある有名なイタリア人選手は「俺はワットではなく、ハートで走る」と語ったという。ペダルを回す力を示すであるワット数を完全に無視できない時代に生きていることは承知のうえでのことだ。人間は完全に疎外されてもいなければ、完全にシステムに組み込まれて構造化されて生きているわけでもない。身体やリスクをロマンチックに語ることのできる時代はとっくに過ぎ去った。

なによりスポーツをする者の安全と人権が守られなければならない。しかし、というよりは、だからこそ、勝負にあって最後の言葉を語るのはこの私、この身体にほかならないという意味において、この発言は正しいのである。

## 「メタ的」な話から始めよう

総合教育研究センター 関本 克良

「メタ的」という言葉を目にするので、何のことかと思って調べてみると「超越した」「高次の」「ある学問や視点の外側にたって見る」などの意味だそうだが、いまいち分からない。後で、この言葉がアリストテレスの『メタピシュカ（形而上学）』に由来していると知って、ようやく少し分かった気がした。「メタ的に考える」とはどんな感じか。

例えば、小説の主人公が「小説など作り話だ」と言う時、また猫が「吾輩は猫である」と言う時、このように自分について客観的に語る主人公や猫が「自分を超越した」ように感じる、そんな感じだろうか。

私は授業の最初のあたりに、よく人間について「メタ的」に考える話をいれるようにしている。それは「人間とは〇〇である」というような話だ。アリストテレスの論理学に三段論法というのがあって、ウェキペディアにこんな例文がある。

大前提：全ての人間は死すべきものである。

小前提：ソクラテスは人間である。

結論：ゆえにソクラテスは死すべきものである。

最初（大前提）のところで「全ての人間は〇〇である」というのを決める。これが決まると、人間に関係する全ての結論が「〇〇である」ことになるのだが、つまり「人間は〇〇である」が決まれば、およそ人間に関して「〇〇である」ことは「正しい」ことになる。逆から言うと、「人間は〇〇である」が決まっていなければ、人間に関して「正しい」と言えない、ということなのだ。だから、「メタ的」な話は、形而上学が分からなくても実はとっても重要で、最初に「メタ的」な話を決めてしまえば、もう結論が出たようなものなのだ。



例えば、経済学の父アダム・スミスは「全ての人間は自分の利益を最大化するものだ」と「メタ的」に決めた。だから、経済学では自分の利益を最大化することが「合理的」で「最適な選択」であり、人間にとって「正しい」ことになっている。法哲学のトマス・ホッブズが「人間とは自己の生存のために互いに戦争するものだ」と「メタ的」に決めた。それで、人間は生き残るために必要なモノを所有し、自分の所有物（思想、身体、財産 etc.）は誰にも奪われないという「不可侵の権利」が「自由」の基礎になった。だから、法学では不可侵の権利としての自由が、自己の思想、身体、財産に対して他人の介入を排除するのを「正しい」ことにする。この反面、生活が如何に貧しく苦しんでいても、生存に必要なモノを他人に要求することは実質的な権利ではなく、正しくもない、ことにした。こう書くと、生存権について異議があるかもしれないが、社会権が自由権に勝てないのは、遺憾ながら事実だ。それは「人間は生存に必要なモノを他人に要求することができる（＝社会権）」という話を、法学の「メタ的」な語りになかったからだ。

何が言いたいのかというと「人間とは〇〇である」が決まらないと、人間にとって「正しさ」が決まらない、ということなのだ。人間をメタ的に考えないと「正しさ」が決まらないことに気づいた時、学問のツボが分かった気がして面白かったので、学生と共有したいと思っている。だから、何か学問をする時には、まず「メタ的」な話から始めよう。

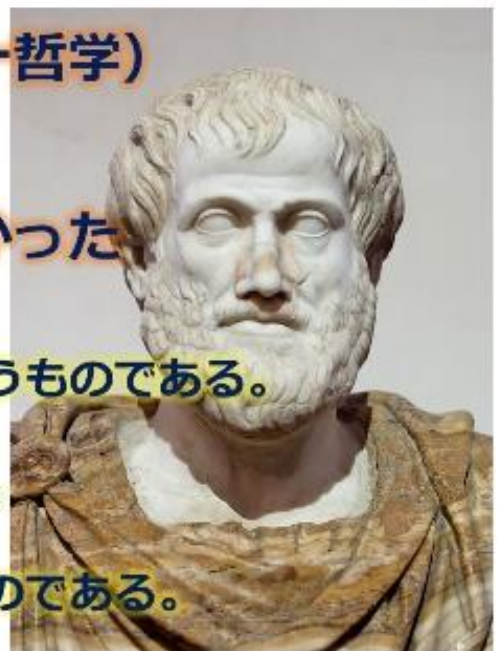
## メタピシュカ（人間の第一哲学）

アリストテレスに、  
こう言ってほしかった

大前提 全ての人間は、助け合うものである。

小前提 あなたは、人間である。

結論 あなたは、助け合うものである。



## ICT の普及とわたしたちの生活

総合教育研究センター 山本 和行

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大が始まってから、もう 1 年半になります。みなさんも含めて、世界中の人たちの生活が良い意味でも悪い意味でも大きく変わっていく時代に、私たちは生きています。

この 1 年半のあいだに大きく変わったことはいろいろとありますが、なかでも強く感じるのは、それまでじわじわと生活のなかで欠かせないものになりつつあった ICT (Information and Communication Technology) との距離が、一気に縮まったということです。一般的には、デジタル技術の普及スピードが 5 年は早まったと言われていています。学生のみなさんも日々オンライン授業を受けたり、企業の面接や対外的なやり取りがオンラインでおこなわれたりしていることで、そうしたことを実感しているかもしれません。あるいは、スーパーやコンビニなどでセルフレジの導入が急速に進んだことも、感染対策の一環として現金の直接的な受け渡しを避ける意味合いが含まれていることを知れば、新型コロナウイルスの感染拡大によって、ICT の普及が急激に進んでいることがイメージできるのではないのでしょうか。

学校現場でも「教育の ICT 化」が急ピッチで進んでいます。近年、政府が推進してきた「GIGA スクール構想」のもとで、学校へのノートパソコンやタブレット型パソコンの導入、およびこれらの機器をインターネットに接続する無線 LAN の整備が進められ、生徒全員が各 1 台はパソコンを持って学習を進める環境が整えられてきています。天理大学が「PC 必携化」を 2021 年 4 月から開始したことも、こうした教育をめぐる流れのなかで捉えることができます。

また、新たなデジタル機器・デバイスの開発によって、人々の生活が大きく変わる可能性も至るところで生まれてきています。とりわけ、翻訳技術の向上は世界中の人々のあいだに存在する「言語的障壁」を取り払い、人々のあいだの距離を一気に縮めるのではないかと思います。「Google 翻訳」などに代表される機械翻訳は、数年前までは実用に耐えないほどの精度しかありませんでしたが、ビッグデータの活用、AI 技術・ディープラーニングの技術開発の進展を背景に翻訳の精度向上が飛躍的に進み、今では「DeepL 翻訳」などに代表されるように、実用に十分耐えうる精度を備えた翻訳エンジンが利用できるようになりました。こうした翻訳エンジンを活用した「翻訳イヤホン」などもすでに実用化されていますから、長い時間をかけて言語教育を受けなくても、外国語の存在を意識することなく、異なる言語を話す人々と自然に会話することができる時代が、もうすぐそこまで来ていると言えます。

こうした ICT の急速な普及は、わたしたちの生活はもちろん、わたしたちの教育のありかた・学習のありかたも大きく変えていきます。少なくとも、わたしたちがこれまでに経験してきたことや、今まさに経験しているようなことを、大きく見直す必要があることは確かです。技術の進歩がわたしたちの生活や考え方までも急激

に変えていく、そうした時代をわたしたちは生きているのかもしれない。

(写真) 最近購入した中国・深圳の TimeKettle 社のイヤホン型翻訳機。1 万円以下でなかなかの翻訳精度です。



## こころの健康法 15

## 波がくるのを待ちましょう🐬

コロナの感染拡大がなかなかやみませんね。感染者の数が一時的に減ってもまた増えてきて、元通りになる日はいったいつになるのか???

先が見えないので、ちょっと疲れてきましたね。。

ところでみなさんは、サーフィンは知っていますか？あのハワイなどの海で、華麗に波に乗るやつですね。

サーフィンでうまく波に乗るには、体幹の力やバランス感覚、反射神経、体力など、いろいろな能力が必要なのだそうですが、それに加えて大切なのは、「いい波がくるのを待つ忍耐力」だそうです。いい技があっても、いい波がこなければ、いいサーフィンはできない。これはサーフィンだけでなく、あらゆることにいえることかもしれませんね。まわりのいろんな流れが整ってきたときに、はじめて人は「波に乗る」ことができるのだという。。

「辛さ」を「抱える」と書いて、「辛抱」です。待つのは辛いですが、やがていつか、いい波（チャンス）がやってくると信じて、「そのとき」を待ちましょう！！



CRADLE(クレードル) 第19号 2021年7月発行

発行者 上田 喜彦 天理大学 総合教育研究センター

編集 仲 淳 杉本 めぐみ

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050 電話 0743-63-7092 (内線) 6111

印刷 株式会社 春日